物名彙（1895）には重臣（Shigeomi）となっている。もっとも上野益三氏の日本博物学史には，さすがに巨に従い字音読の振がながつけてある。しかし本当の読方が果してどうであったかは知るよしもないけれども，本書の校訂に当った息子の名である重光を訓読みにするのが一考に価するなら，重巨は訓読でシゲタカと読得るように思われる。もっとも，なんでも字音読みでお茶をにごしている，便利主義の今の世には，こんな愚問は通用しないかも知れないから，音読で結構だと思うが，なにはともあれこの著名の名は重巨であって重臣ではない。こんな閑文字は冷笑に価するだけだろうが，たまたま外国の人から query があったのでしるして見た。　（東邦大学薬学部）

□1972年植物分類学関係文献目録 pp. 89, 1974年9月。科学博物館植物第一研究室金井弘夫博士によって種子植物を中心とした植物分類学関係の文献目録1972年版が編集された。1970年まで金井氏の前任者奥山春季氏が編集していたフロラ関係文献目録を継続させた形がとられている。奥山氏の目録は惜しくも中断してしまい，その続刊が望まれていた。今回の金井氏の目録は表題も変わり，全体として集録した文献の範囲を拡げ，内容を 1）地方別目録，2）分類群別目録，3）その他に分け，3）には人名という生物学者に関する項目も含んでいる。特に目立つ点は新しく発表された学名，組み合わせ，和名の採用を重視していることで，新名目録たる性格をも備えている。ただし，ここには命名規約上明らかに無効な名や有効性の疑わしいものも含まれており，この目録に登載されているといって有効になるものではない点を注意すべきである。このような意味では，この目録は金井氏が新しく編集した，主として日本人による植物分類学業績目録ともいえるものである。残念な点は例えば田村道夫氏のシラネアオイ科（Tamura, M.: Morphology and Phyletic Relationship of Glaucidiaceae Bot. Mag. Tokyo **85**: 29–41）が落ちてしまったことに示されているが，いくつかの見落しのあることである。この点に関しては事前にまわりの研究者の協力をも得て完全を期する必要があるが，この種の印刷物には本来補遺がつくものでもあろう。

金井氏によればこの，目録は希望者に無料で配布するが，代わりに文献，標本などの資料提供を希望するとのことである。このような基礎的な仕事は日本では評価の低い傾向があり，その費用捻出などの苦労も多いが，長く続けば続くほど価値のでるものである。そのための分類学研究者の協力とともに，今後，内容の充実と続けての出版を期待したい。ほぼ同時にシダと種子植物とを対象とした，Kew Record of Taxonomic Literature 1971 も出版された。日本で見ることのできない文献がいかに多いか驚くべきものがある。金井氏の目録中にも容易に見られない文献が散見される。研究，特に新学名などを発表する際には，遠い将来においても外国の研究者でも見ることのできることを条件にして発表すべきである。　（大橋広好）